持続可能な農業を目指して
三舟の里保全会　18年の歩み

～　変わりゆく課題への対応　～
“仲間づくりと交流”

令和7年3月10日

千葉県君津市

三舟の里保全会

講演の前に

元君津市役所職員です。18年間二足の草鞋を履いて農業問題に取り組んで来ました

平成18年　人事異動で農林業担当課に異動

　農地・水・環境保全向上対策事業に出会い、担当を申し出て普及に努める

平成19年

　三舟の里保全会　発足　以後、事務局17年　会長兼務1年

令和元年（退職後）

　三舟の里保全会として「実質化した人・農地プラン」策定済み

　市長から直接「人・農地プラン」策定の協力要請

　➡以後、2年間で耕作可能な農地の30%　約900haで策定

　　多面、農地中間、人・農地　3点セットのメリットで攻める

市職員と保全会事務局として携わってきた18年の記録です

農業の課題に向けて、一部の人が頑張っても、それは「小さな点」です

　講演テーマ　交流（活動では連携を意識）

　目指すもの　それは、持続可能な農業

農業の悩みは共通　仲間づくりと交流の始まり

いろいろ話を聞くなかで・・

18年度にパイロット（試験）事業が始まっていた

平成18年

人事異動で農林業担当課に異動

上湯江だけではない！　市内農業の課題は共通

➡同じ悩みを持つ集落　多数　担当業務に加えて　課題解決に興味が湧いた

高齢化、後継者不足　　施設の老朽化　　更新・補修資金

人　　物　　金

上湯江をモニタリング
皆が課題に向き合う
きっかけの
お手伝い

➡農地・水・環境保全向上対策で「物」「金」は何とかなる

事業の普及　反応が悪い

地元負担なし、日当も出る
美味しい話には何かある？

事務が煩雑

会計検査

サポート

サポート　具体的には

事務局が決まれば直ぐに組織化

本当のサポート先は事務局

・事務の煩雑さは、ほぼ想定内

国としては創設事業で、何とか纏め上げたいのは分かるけど

➡県の協議会も細かく口出しはするけど、

事務局の苦労部分は、何も考えていない

➡報告の参考様式だけで、何も決まっていない

ならばどうする！

事務支援　事務管理ソフト　市内全組織に配布

作業・事務記録、会計、精算を支援

業務支援　保全会で同じ活動をしているから問題点、課題が見える

活動の疑義は、千葉県の協議会へ報告と改善要求

市と組織の信頼関係構築
↓
仲間となり交流

同じ事務処理をする　➡　市としては組織間のブレを防ぐ　会計検査対応でもある

上湯江の農業の課題　どうする？　最初の壁

・昭和40年代の初め
　構造改善事業　完了　　中山間部　1反区画　　平地部　　3反区画
・平成17年頃の課題　　完成後約40年　経年劣化、水路の不同沈下、漏水
　　機械の大型化　出入口の破損、沈下

どうする？

このまま放置できない！

水利組合　改修の提案

否　決

背景
　少数の稲作兼業農家　　世代交代しても後継者は期待できない
　稲作の将来展望（もしかしたら市街化？）　➡　地元負担金2割は借金

農地・水・環境保全向上対策事業との出会い

・平成18年10月　農地・水・環境保全向上対策事業　説明会

えっ！
否決

金銭負担ないのに　なぜ？

典型的な　総論賛成・各論反対
非農家の多数が反対（休日に作業したくない）

・平成19年　1月　再度説明会　**基本反対**

ならば！

農業資源保全の
同　好　会

事業導入同意の条件　参加は自由
賛同者20数名と各団体の役員36名で組織化
　自治会、水利組合、農家組合、畑地灌漑組合
　後に小糸在来愛好クラブが加入

・平成19年　4月　市と協定
・平成19年　6月　採択　　三舟の里保全会として正式に発足

活動に対する事務局の基本的な考え方

活動の入口
　農地・水・環境保全向上対策事業

やるべきことはやる、
資金があれば何事にも
チャレンジできる

活動の基本とルールは守り
型にとらわれない　良いと思うことはやってみる　ダメなら止める
活動の支え1　活動の原動力＝職人等多彩な人材が生み出す地域力
地域力維持のために　自分達で出来ることは、自分達で
活動の支え2　周囲の仲間との連携（交流）　目的に向かうモチベーションの維持
農業の課題は多重課題　一発で解決するほど甘くない

基本は
コミュニケーション

全部　仲間との交流で
繋がっています

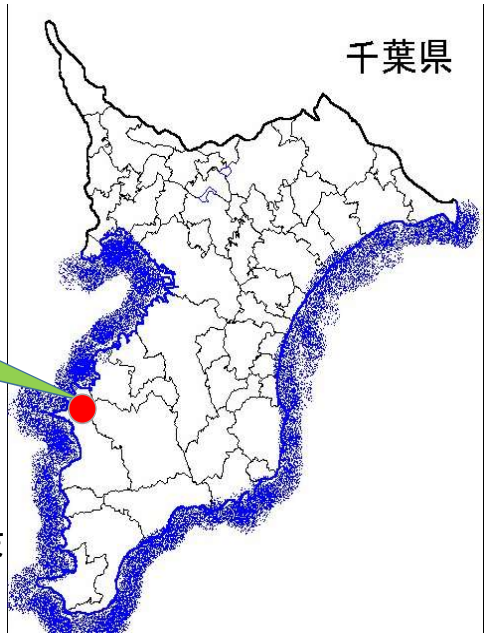
このようなコンセプトを基に「結果を残せたと思える」活動
仲間づくりと交流 ➡その都度の積み重ね　結果的に大きな広がり
広報紙発行　➡ 田舎のインターネット　広報の力は凄い
有害獣対策　➡これが接着剤となり、集落全体が一つになった
人・農地プラン　➡ 農業者が一番心配していた後継者問題が解決

三舟の里保全会の位置

千　葉　県

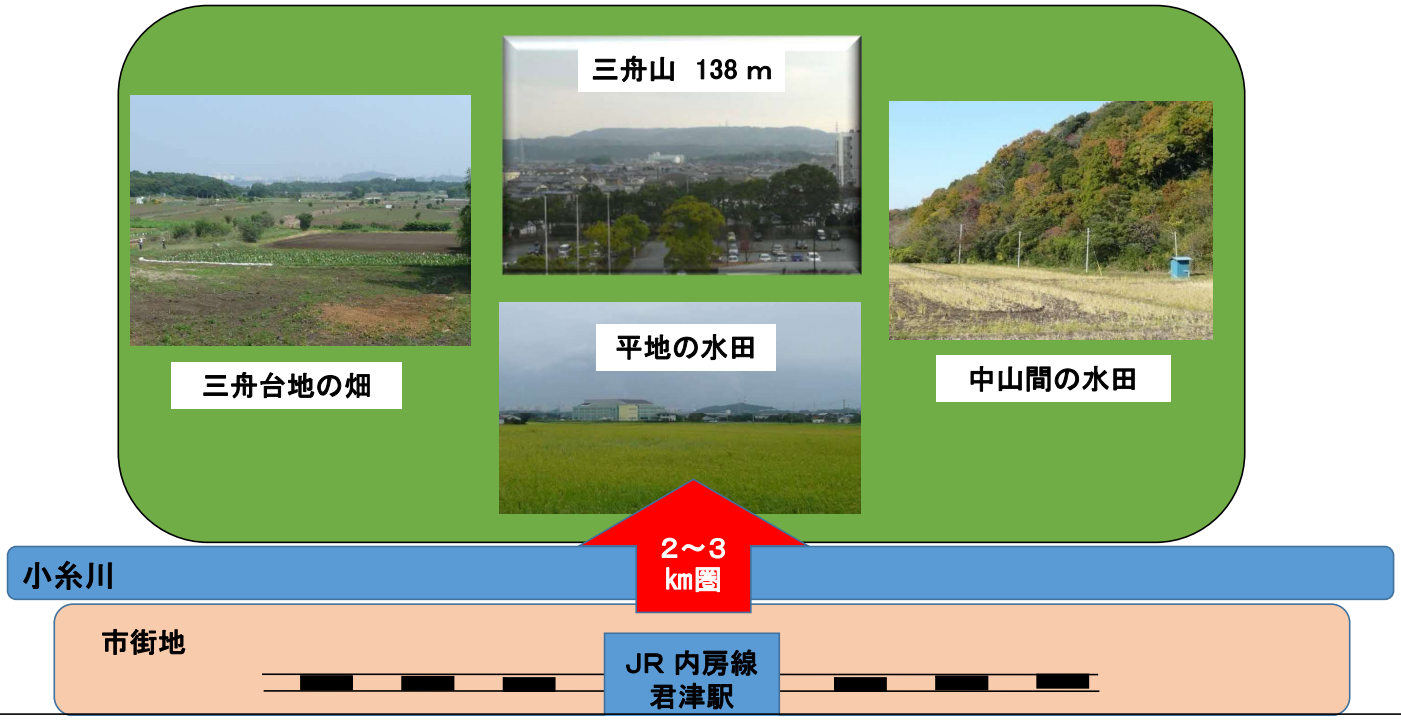
君　津　市

上湯江地区



君津市
　昔は、半農半漁のまち
　その後は、新日本製鉄を中心とした工業と農業のまち　➡後継者世代は、関連企業へ

三舟の里　こんなところ



三舟の里保全会の概要

・構成団体　上湯江自治会
上湯江水利組合
上湯江農家組合
三舟台畑地灌漑組合
後に　小糸在来愛好クラブ
（在来種の大豆を守り地域の活性化）

参加者は様々な技術を持っている
多様な組織で活躍、職人が多数いる

活動の大きな機動力

・資　　源　田：25.99ha　畑：29.12ha　草地：0.24ha
開水路：13.3km　パイプライン：5.4km　農道：4.7km　ため池：2ヵ所
➡資源構成は、大型のトマト栽培施設の進出などで変化している
敷地 6ha　ハウス1棟 4ha

仲間づくり（組織化、活動の支援）

交付金
夏までにほしいなー

・新規の組織立上げ支援、視察受け入れ

➡組織の意思決定で　直ぐに活動できるメリット　は大きい

市の予算頼みでは進まない　（要望→予算化→実施）

・意見交換

➡違う地域の課題や取組は活動の参考に

仲間づくり（実績の一部）

視察受け入れ

山梨県　北杜市の活動組織
千葉県　袖ヶ浦市の活動組織
〃　夷隅吹良環境保全会
〃　夷隅農林振興センター
君津市　三直地区
〃　戸崎地区
〃　下湯江地区

人・農地プランの策定（定年後）

君津市農地の30%　約900ha

➡多面、農地中間、人・農地　３点セット

組織化支援・相談

とみさきの里を守る会（戸崎）
下湯江環境保全会（下湯江）
八重原地域資源保全会（三直）
八幡資源保全会（八幡）
練木の農業を守る会（練木）
大山野資源保全会（大山野）
小櫃東部保全会（末吉土地改良）
千葉県九十九里町の活動組織
〃　東金市の活動組織
〃　山武市の婦人会組織（資料送付）

変化する課題への対応

取組みの入口
皆さん共通です

・発足当初　① 昭和40年代に整備した　農業施設の老朽化
　➡特に水路の老朽化は、小破修繕の域ではない
　② 少ない参加者
　➡必須活動　盛りだくさん　水路の更新　やっていけるか？

・③ 有害鳥獣　うちにも来た　イノシシ問題　当時は、まさかの問題
　➡上湯江だけではない　周辺集落も同様だった

その後の課題
同じようです。
今は「高齢化」です

・④ 18年も活動していると　参加者、担い手、役員が高齢化
　世代交代を進めたが、平均年齢は、5年前の62．6才から64．5才に上がった
　➡高齢化は想定済み　人・農地プランをエンジンに到達点を目指す
　　➡経営体への集積から効率化に向けた集約へ

・⑤近年は、ナラ枯れによる倒木　防護柵への突然の倒木対策（事前伐採）

当初の課題① 施設の老朽化 水路

交付金の自由度

・活動の方針（事務局の方針）
　自分達でできることは自分達でやる　　やれることは何でもやってみる
　➡ 地域力を維持しないと集落は守れない

　➡老朽化は年々進行
　　出来ることは、共同活動で直営　出来ないことは、長寿命化で委託

・水路更新作業の安全面でも活動の住み分け
　➡共同活動　250mm迄の水路は直営
　➡長寿命化　300mm以上の水路または、交通量のある市道沿線は委託

チャレンジ精神は
活動の原動力

・制度の組合せで交付金の支出削減
　➡交付金の効果的な活用のために
　　交付金に加え、土地改良区の原材料支給制度を併用

課題①　施設の老朽化　水路

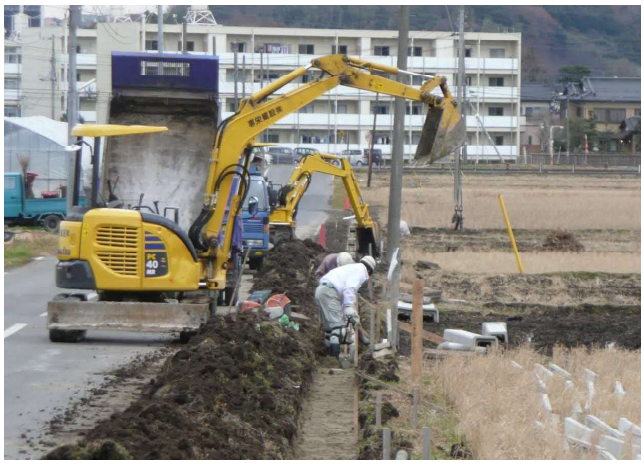
共同活動　水路の改修（直営作業）　平成20年度から毎年継続中

実績　H20～30　　2，434m

課題①　施設の老朽化　水路

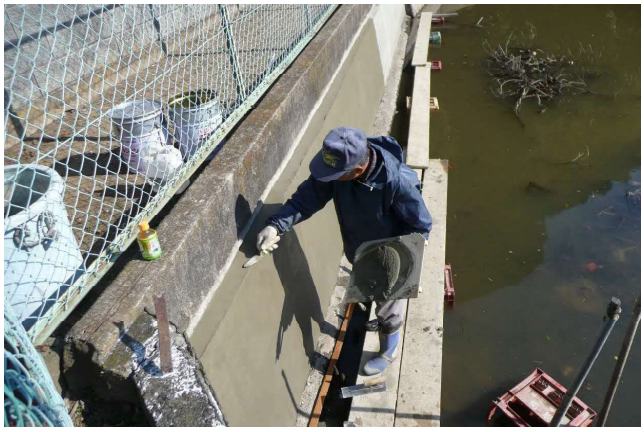
長寿命化　水路改修（委託）

実績　H23～R6　　952m



課題①　施設の老朽化　ため池、農道

長寿命化　ため池の漏水補修（委託）　　農道舗装（委託）



課題①　施設の老朽化　揚水ポンプ

長寿命化　水中ポンプ更新　　畑灌ポンプ更新

当初の課題②　少ない参加者対策

「農業者のため」と勘違いしている人がいる

保全会の力を見せる

・非農業者の協力を得るために

➡地域の向上を目指していることを伝える

➡地域が変わってきていることを見せる

大事なのは　変化を感じさせること　活動の達成感（水路改修）

水　路　劣化はどこも同じ　優先順位　活動が目立つ場所から始めた

草刈り　耕作放棄地の再生を目指す　➡環境の向上、地域の変化

活用

活動から除外可能
除外したら無意味
逃げない
皆で考える

畑　小糸在来の作付け拡大　イベントで交流人口の拡大

田　景観植物による環境美化活動

ビオトープで地域の自然を再発見

活動を披露する仕掛け

広　報　広報「三舟の里」の発行　➡年配者に伝えるには効果的

耕作放棄地の再生と活用（先ずは草刈り）

草刈り　平成19年当時

後に ビオトープ

後に 営農再開

耕作出来ないのには、必ず理由がある

原因者にしない（問わない、責めない）

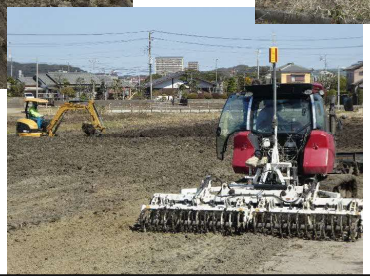
参加者全員で草刈り　➡活用に誘導

耕作放棄地　再生（R2）　作付け（R3）

H19～
湿田遊休農地
草刈り

再生

再生



再生

作付

収穫

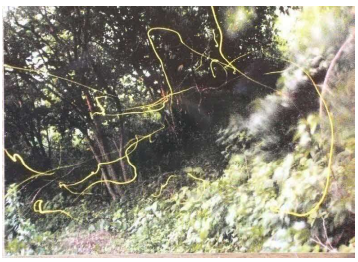
耕作放棄地の再生の活用（耕作だけではない）

春　菜の花　　お花見ウォーク

秋　コスモス

耕作放棄地の再生の活用（耕作だけではない）

ビオトープ　お花見ウォーク



イノシシ被害　残念ながら閉鎖

伝えるためには　田舎のインターネット

広報発行の目的　一般的には活動報告

➡ 一度は否決された組織　活動報告の他にも伝えることは多々ある

活動の内容と目的が伝わらなければ意味がない

➡なぜ、この活動　どうしたいのか　➡全ては個人ではなく、集落のための活動

ネットの時代　なぜ紙媒体の広報なのか

➡ ネットで配信しても効果が限定的

回覧は田舎のインターネット　全戸に伝えるには「紙」の回覧が効果的

➡年配者は耕作できなくなった自分の田畑や地域の環境悪化が心配

コピーして保存したり、良く見ている

大学生の中に地域貢献の参考として活用した者がいた

➡写真は個人情報の塊　危険な拡散の防止

広報紙「三舟の里」の発行

目　的　活動の報告と方針の周知
※活動の方針を伝えることで理解を求める

Ａ　４　回覧と同一規格

片　面　発行回数を増やし、直ぐに伝える
１回あたり　記事数５～６

カラー　写真の多用

発　行　不定期発行
平成20年５月27日　第１号発行
現在、第３１０号

発信は、集落のインターネット「回覧」　年配者には、これが一番心に刺さる

まさかの課題③　有害鳥獣　イノシシが出た

三舟の里の有害鳥獣

- イノシシ
  - 農作物被害
  - 車両と接触事故
  - 小学校付近に出没
- ハクビシン
- アライグマ
- アナグマ
- タヌキ
- 野ウサギ
- カラス
- ドバト

三舟山
動物園
状態

サルは数回出没
シカ、キョンの目撃は、今はない

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策　必要性）

猟友会との連携　出没情報の提供

捕獲が繁殖に追いつかない

被害の拡大
住宅地や小学校付近にも出没

保全会として防御と駆除を検討
H26　防護柵の申請

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策やりきれるか？）

- 申請したけれど・・・不安でいっぱい

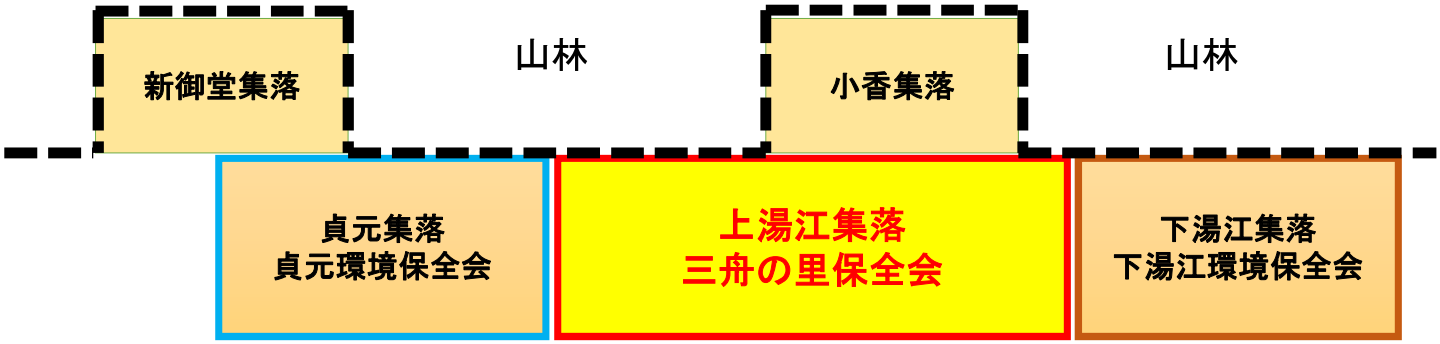
不安①　日当は支払えない　ボランティアで何人の協力があるか
不安②　申請は一部、続きの柵（金網）設置は大丈夫か
不安③　実際、どこに張るか
イノシシの危機は地域の課題（庭先、小学校付近にも出没）
➡農地を囲っただけでは意味がない　⇒住宅も守るため、山際に張る

広報「三舟の里」で
目的が　農業被害防止 ➡ 地域の 危機管理　であることを伝える

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策の連携）

山際に張るには、連携しないと意味がない（周辺集落との調整）

イノシシ防護柵（金網）の連携設置イメージ



仲間づくりが役立った

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策　防護柵　準備）

市道法面の支障木　伐採

竹林（メダケ）　伐採

女性は道路の清掃など、軽作業で活躍

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策　防護柵　準備）

竹林（孟宗竹）　伐採と雪折れの片付け

市道法面支障木　伐採

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策　防護柵　設置）

設置

設置

課題③　有害鳥獣　（イノシシ　防護柵　管理）

定期管理

台風被害後の補修

イノシシ対策は、集落の危機管理
管理作業は、保全会主導から自治会との共同作業へ移行

課題③　有害鳥獣　（イノシシ対策　実績）

- 実績

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
伐採	1．9km	1．5km	―
網張	1．9km	―	1．5km
日数	15日	10日	6日

- 参加者は、保全会員のほか、家庭菜園の方や女性も
  毎回20～30名

皆頑張ってくれました
水路の工事と草刈りだったので
イノシシ対策は新鮮な作業？

- 設置の感想
  ボランティアで、これほどの協力が得られるとは思わなかった
  設置する場所の段取り（所有者の了解、支障木の伐採・清掃・処分）が大変

一番困難な課題④　高齢化対策

・高齢化への危機感

役員会　多面事業に代わるころから危機感の高まり　多方面に影響する

一番大きな課題
多方向からの
検討が必要

・市議会　一般質問　国の施策人・農地プランどうするか

市　　検討の方向

保全会　　実感として必要性を感じ始めていた

上湯江なら策定できる予感はあった　　策定は保全会

➡きっかけ　企業誘致（とまと栽培施設）で農地中間管理事業が条件

・上湯江版　人・農地プラン　平成28年3月31日　策定

➡地域の課題は何となく分かる　⇒調査、徹底した話し合いなしで、短期間で策定

➡これが後に、失敗（エンスト）の原因となる　　後に国は「実質化」に向けて制度改正

課題④　高齢化対策（当初の人・農地プラン）

・上湯江版　人・農地プラン（平成28年3月31日　策定）の内容

もっともらしい
普通のプラン

中心経営体の確保状況

中心経営体はいるが十分ではない（ほとんど集落外）

将来の農地利用の在り方

担い手に集積・集約

新規参入を促進して、新規参入者に集積・集約

農地中間管理機構の活用方針

原則として農地中間管理機構に貸付け

動かない原因
プランの策定に問題は
あったけれど、農地中間
が一緒に動かなかった

反省
企業誘致が目的だった
対象は農業者と所有者

実は
困った

企業誘致（きみつトマトガーデン）で動いたけれど・・・

動かなくなった　⇒何処の何を見直したらいいか？

課題④　高齢化対策（人・農地プランを考える）

・策定はしたけど動かないプラン　上湯江だけではなさそう（ちょっと安心）
・令和元年　「人・農地プラン　実質化　」に向けて

ステップ1	アンケート調査	やり直し　ちょっと面倒だけど
ステップ2	図面で可視化	何となく出来そう
ステップ3	話合い	アンケート内容のイメージはあった

想像以上に大変、でも見直した価値（成果）は十分あった

➡**5年後の姿と今から対策の必要性が見えた**

課題④　人・農地プランの実質化に向けて

【ステップ1　アンケート調査】

保全会（設問5）と県（設問20）対立

回答の集計と分析どうするの

・営農の現状　自作農より貸付が多い
・何を聞く　国は、年齢層と後継者の有無、後は地域にお任せ
プランや図面への落し込み、将来像を想定するには何を聞く・・・・・
・調査方法　記名式（個人情報の取得　ハードルは高い　信頼関係？）
➡回答率　96%　　→何のための調査か？　説明が必要

農地所有者　「上湯江の農地活用に関するアンケート調査」
耕作状況（自作・貸付）、年齢層、後継者、5年後の管理状況

耕作者　「上湯江での営農アンケート調査」
基本事項（年齢、後継者等）、耕作農地、営農の現状と5年後

所有者の回答には想定外の内容もあった　失敗か？　でも想定外の課題が見えた

課題④　人・農地プランの実質化に向けて

アンケート調査　想定外の結果

農地の所有者・管理者　➡相続や世代交代で農業をやっていない者が多い

失　敗
農地貸借　ほとんど白紙

自分の農地が分からない

誰が耕作しているか、借り手が分からない

➡農地に無関心　かなり深刻な状況　⇒大きな課題

お嫁さん　仕方ない
親は亡くなった、施設入所

調査のやり直し（農地中間管理事業とセットで考える）

➡所有者ごとに農地データを提供

農業委員会の農地貸借データ、農業者の耕作農地申告データを付して、

「農地中間管理機構への貸付意向の確認」

➡事務局が個別回収で意向の聞き取り

➡昔から相対の貸付が多く、農地データを提供しても・・・

世代交代等で、貸し手と借り手で貸借農地に齟齬　⇐借手側から検証する

課題④　人・農地プランの実質化に向けて

【ステップ２　図面で可視化】

・地番図に中心経営体ごとの耕作地を表示　⇒調査の落し込み　図面は正しいのか？

➡耕作者の農地バラつきを可視化できた　⇒将来の集約化に向けた第一段階

課題　貸し手と借り手で貸借農地に齟齬　⇒確認する必要がある

全くの想定外
借手側から所有者を特定

➡人・農地プランに基づく担い手会議　開催

主旨説明

制度改正、課題、実質化に向けた手順の説明

議題　1　借りている農地の確認（可視化した図面）

2　新たな貸出農地の借手

3　おおむね5年後の営農計画（アンケート結果　5年後の姿）

逆パターンの作業

➡借り手により　公図に耕作農地を落し込み、所有者を確認

課題④　人・農地プランの実質化に向けて

【ステップ３　話合い】

・所有者、担い手を同時に集めても共通の話題は少ない　⇒会議がつまらない　配慮

・話合いの方法

➡意見等を聞く機会の確保

農地所有者・管理者向けアンケート　２回

耕作者向けアンケート　１回

➡三舟の里保全会　役員会　　６回

➡担い手会議　１回

➡周知回覧

アンケート結果の報告　１回

実質化された人・農地プラン　１回

一番大事なこと

状況を聞く、意向を聞く、話合い
策定の進捗や結果の報告は
手抜きしない

全てがこれで決まる

・令和２年１月１１日開催の役員会で「実質化された人・農地プラン」の承認

課題④　進行管理できる「人・農地プラン」

旧プラン　**なぜ？動かなかった**　　どう改善した

・地域の課題は何となく分かっている　「こうだろう？」で策定した

➡旧プランは、様式に当てはめた作文　⇒策定が目標・目的になっていた

➡細かく意向調査しないと分からないことが多い

➡どのように聞くか　⇒相手は知識なし　設問で回答が変わってくるので注意

新プラン

・誰の 何のためのプランか？分からないことの反省

➡農業者向けで、非農家にメリットがない　➡農地中間管理機構と契約することでメリット

・進行管理できるプランではなかった（当時の制度？）

➡旧プランは、何時までに　何をする　のか決まっていなかった　➡ここは絶対反省

➡目標（相対の契約一掃）とスケジュール（翌年度完了）を掲載

➡撤退予定の経営体もプランに入れて、円滑な農地引継ぎの話合いに繋げる

課題④　活きた人・農地プラン（地域計画）のために

- 人・農地プランは策定が目的ではない　作ったら、そこがスタートライン
  活用して 地域が動かなければ意味がない
  集落内に中心経営体がいる中で、新規の育成、呼び込み
  畑作　4経営体（40才代3社　50才代1名）
  稲作　3経営体（40才代2社　70才代1名）
  ➡地域計画は、アンケートで判明した耕作者の紐づけではない
  ➡動かすには相対の契約を一掃し、直ちに「農地中間管理機構」と契約
  地域を動かせる経営体に集積すること

プランは単なる書き物で、動かす原動力は「農地中間」との貸借契約

農地中間が直ぐに後を追わないとプランが休眠

・プランを活かす＝中心経営体の環境整備＝相互協力の気持ち
  ➡お互いに物が言える環境＝耕作しやすい環境の整備
  ➡保全会の交流会　集落と入り耕作者の交流（お互いに仲間意識の醸成）
  ➡入り耕作者から保全会の役員（40才代）

地元との壁、距離の排除

課題⑤　ナラ枯れ対応

「カシノナガキクイムシ」がナラ菌を媒介し、ブナ科の樹木を枯らしてしまう伝染病です

被害状況は
　保全会で設置したイノシシ防護柵等への倒木
　現在、人や家屋等に被害は出ていませんが・・・・

何が怖いか
　引き金は、台風や強風ではなく、無風でも突然
　電柱やドラム缶ほどの木が倒れてきます

対応
　罹患木及び罹患が疑わしい樹木の伐採
　　マテバシイ、ナラ、クヌギ、コナラなど
　自治会や保全会で伐採の協力依頼
　➡特に家屋や墓、道路へ倒木の危険がある木

伐採に30～100万円
もしも、人に・・・
の気持ちで伐採

ナラの大木が、道路に突然倒れましたが、隣接のケヤキに当たり、揚水機場への直撃は免れました
引込線は、直撃により切断です

最後に　伝えたいこと

三舟の里保全会は、「小さな点」に過ぎません

同じ課題を持つ組織同士　「線」で「面」として繋がり　交流を深め

連携して持続可能な農業を目指し　共に前へ進めています

今ここに　新たに栃木県の皆様と繋がりました

今後とも　この出会いを大切に　共に持続可能な農業を目指しましょう

千葉県君津市　三舟の里保全会

ご清聴ありがとうございました

令和６年度多面的機能支払交付金に係る活動組織研修会　アンケート

農業・農村の多面的機能増進活動において、今後の事業推進等の参考にさせて頂きますのでご記入ください。（該当するものに○をつけてください。）

QR コードからもご回答いただけます

問１　あなたの性別・年齢・居住地を教えてください。

●性別（　男　・　女　・　どちらでもない　）

●年齢（　40 代以下　・　50 代　・　60 代　・　70 代以上　）

●市町名（　　）

問２　本日、参加した感想についてお聞かせください。

①来年も参加したい　　②来年は参加したくない

問３　事例発表（三舟の里保全会）についてお聞かせください。

①よかった　　②普通　　③よくなかった

印象に残った点をお聞かせください。

（　　）

問４　研修会についてのご意見やご感想、また、今後の改善点などをお聞かせください。

（　　）

問５　今後、活動組織の構成員として参加してみたいのはどちらですか？

①とちぎのおいしい農産物販売市　　②とちぎの農村体験　　③その他（　　）

生きもの調査に取り組む組織へ

問６　「とちぎ調査隊」の受け入れ可否についてお聞かせください。

①可（組織名：　　）　　②不可

※とちぎ調査隊とは…自然や生き物に関心のある都市部の子供たちで結成されているグループで、栃木の農村の役割や魅力を「生きもの調査」を通して発信している。

ご協力ありがとうございました！

アンケート回収ボックスにお入れください。